



I-OWA マンスリー・セミナー講演より 公と私、そしてネット社会

対談:伊藤 宏一氏、岡本 和久
レポーター:赤堀 薫里

岡本| 12月に私はニューヨーク郊外に住んでいる古い友人に会いました。その時に彼が言っていたのは、シェアリングが、コミュニティの中でのキーワードになってきているということでした。彼の場合、主として車が直接的には大きいようです。お互いの信用という部分については、もともとコミュニティとして出来上がっています。その上で情報の共有化にIT技術が使われており、それを活用しながら上手く無駄を省いていく。なんでもかんでも自分で持つのではなくて、みんなで使っていけばいいのではないかという発想は、ごく自然発生的なものです。無駄なお金を使いたくないというのが非常に大きな理由だと思います。これだけ原油が下がっていても、ガソリン価格はあまり下がらない。そこで、みんなで車をシェアするというような経済的な要素が、シェアリングという方向に世の中を推し進めている気がして面白いと思いました。一方で、トヨタ自動車の特許を全部公開したとか、知的資本の無償化というような現象も起こっています。シェアリング・コミュニティの動きが、じわじわと進んできている気がしますよね。

参加者| ちょっと脱線しますが、イーテルという架空通貨をアメリカで作っているそうですね。その架空通貨を作ったのは、19歳の学生のようなようです。その通貨は全世界で利用できます。そこで投資銀行が興味を示し、例えば、バングラデシュの水飲み農家に、冷蔵庫を担保にニューヨークからお金を貸してしまおう！というアイデアが出ました。今までお金を借りるということは、何らかの信用が必要ですから、審査等のコストがかかり、為替の交換にもお金がかかりました。それを架空通貨でやればいいじゃないかと。テレビ等の資産があったら、それを元にお金を貸してしまう。いろいろなものを省き、地域金融機関等もすっ飛ばしてしまうとい





長期投資仲間通信「インベストライフ」

うことは、不気味だなと思う反面、面白いなという気がします。プライベートとソーシャルの境目が、曖昧になる時代が来ている気がします。

岡本| そこで信用の問題が出てきますよね。通貨が通貨として成り立っているのは、国の信用があってこそ成り立っています。日銀であれ造幣局であれ、この紙切れでしかない紙幣が通貨として流通しているのは、これがお金だという集団催眠にかかっているからですよ。ビットコインや、それに類似したものが今後出てくるかもしれません。それが流通しだす前提として、ネットの中に「信用」が生まれてくる必要があります。先進国はまだまだネットの中の信用よりも国の信用の方が高いのは言うまでもありません。でも、例えば「ギリシャの場合はどうなんだろう？」ということちょっと考えてしまうんですよ。これは国によってかなり違ってきます。日本は国に対する信頼度は、少なくとも日本人の間では強いですよ。

参加者| 無言のうちに強要されている部分もあり、また、無言のうちに国民がそれを是としているところがありますけどね。「国を信用しろ」、「国が言うことは正しい」と。個の力が出にくいですよ。工夫して制度を壊すということは、犯罪にみられちゃうでしょ？不自由がすごく多いですよ。私有から公共へのまたぎ方がずっと入れる所と、日本みたいにすごく飛躍しなければ入れない国がありますよね。成田空港のように、あれ程、公共性がある所が、何十年も部分的に私有化されているわけですよ。僕は 10 年位で、ソリューションが出てくると思いましたが、全然出てこなかった。もし韓国だったら法律出して終わりですよ。日本はある意味、私有権が強すぎますね。

岡本| 今日の伊藤さんの論点は、私有権か、あるいは国による管理かというより、むしろ中間部分が大事だということですよ。民間の中でのお互いの立場を考えて、上手くやっていくという、その部分を上手に育てていかなければならない。公の部分を私に持ってきていいのか、私の部分を公に持ってきてしまっているのかということではなく、むしろその中間的な部分をどう育てていくのかということですよ。

参加者| インターネットが本来の目的で使われていないわけですよ。アメリカなんかは、インターネットを社会の為に使っていますよね。これを日本ももっとすべきです。山なんか、木がぼうぼうになって誰も子孫がいなく、整備する人がいないからと言って寄付しちゃうでしょ？でも、松茸がとれても人にはあげないんですよ。北海道の漁業をやる人ですが、漁獲の期日は守りますが、捕る魚のサイズを守らないですよ。例えば、捕っていい魚が 20 センチ以下というルールがあっても、それ以上のサイズの魚を捕ってしまいます。本当にみんなでルールを守ってやろう！という気持ちすごく少ないですね。伊藤先生の論点はすごくきれいですけど、日本には難しいなあと思います。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

参加者| 信用の醸成をみんなでどうするかということですが、証券市場の例をあげます。会社のガバナンスは、アメリカはアナリストがしっかりしていて、自分達で監視しているという感じがすごいです。上場するという事は、アナリストに厳しく見られるから、それで信用があるんだと。日本の場合は、そこが全然駄目で、国の基準に合っていることが正しい。何が悪いかというと、自分達も悪い部分があるなと感じます。会社のガバナンスを見ると、日本はお国が管理するという発想がすごく強いですね。

伊藤| 近代社会より前だと、オストロムが言っていたような自主をかなり強くやっていたと思います。沖縄には「もあい」というものが今でもあります。「もあい」の資料を読んでいると、民間の中で10人とか20人で毎月お金を積立てますが、積立てるには、毎月第〇曜日の何時までに積み立てるという掟があり、それを、一秒でも過ぎては絶対いけないわけです。それを厳しくやってきたおかげで、沖縄戦の後も乗り越え、金融機関からお金を貸してもらわずに、なんとかやってこれた。中小企業の決算書を見ると、バランスシートの負債の上に「かけもあい」が今でもあります。消費者金融ではなく、お互い信用できる所で貸し合っているわけです。厳しい自己管理が昔は出来ていましたが、私有の観念が強くなりすぎたことと、国家の力が強ということがあって、共有感覚をたぶん忘れてしまった。若い方はある程度あると思いますが、これをやるとなると相当戦略的に文化として参戦しなければならないと思います。

岡本| ミクロネシアに昔フェイというお金がありました。大きな石のお金です。真ん中に穴のあいたね。あんなに大きなお金をどうやって持ち歩いたのかと思ったのですが、あれは持ち歩かないで、公園に置いてあったそうです。取引があると、「今日からあれは私のだからね。」と宣言し、周りは「あれは彼のものになったんだ」と了解する。それで流通していたそうです。そこに西洋人がやってきて、「こんな非文化的なことがあるか」と言って、それを全て集めて海の中に沈めてしまったそうです。それでも、フェイが公園から海の底に移動しただけであって、流通していたんですね。これはまさに、お互いの信頼で成り立っていたことですね。確かに、ネットは知らない人同士をくっつけていく効果はありますが、ネットだけによる絆、人と人とのつながりを作ることはなかなか難しい。急にネットで宿泊をさせてくれるという情報を得たからといって知らない人が家に泊まりに来られても困るという感覚はわかりますよね。そうすると、コミュニティがあって、それを基盤にネットでお互い知っている人同士が使い合うという方が、現実的な対応として日本でもやりやすいのかなと、思います。

伊藤| 日本は、他の国と違って高齢化が進んでいるので、団塊の世代の方達が、シェアリングエコノミー的なものを身に付ける。例えば、サイトを作ったり、もうちょっと大きな目のスマホでやりあったりすると、他の国にはないような動きになる可能性が出てきますよね、お金や労働もサービスも回すと言うことをすれば、違ってくるのではないかなと思います。ネ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

ツトワーカーみたいなことをやりたいという人が結構いると思うので、もう少しインターネットとつなげていくということをやればいいと思います。

岡本| 昔の長屋は、井戸は一つでしたよね。風呂は火事になるといけないからといって、銭湯でしょ。考えてみればシェアリングエコノミーになっていたと感ずます。

伊藤| 関東大震災の後、東京に同潤会アパートがいっぱい出来ましたよね。同潤会は「同じように潤う生活をしよう。」と言う概念です。いっぱいあるアパートの中でお年寄りから子供まで生活します。エレベータはないけど、お年寄りがいるので階段には踊り場があり、少し休みながら上に上がっていく。中庭が広くて植栽があり、子どもをそこで遊ばせて上から見てあげるとか、食堂があつて、中の人と外の人が食べられる。お風呂は共同のものがある。それが戦時体制で国民生活みたいになり、2DK のような構造になってしまい、ただ休んで労働力を回復して、工場に行って飛行機を作るみたいになってしまった。近代的な共有的な世界を一部やろうとしたことがあつたのです。家計簿で言うと、羽仁もと子さんという、日本で初めて「婦人の友」を作つた人がいます。「婦人の友」で本人が書いてるのは、自分の家計は、「家庭は簡素に、社会は豊富に」というのがスローガンです。「家計の収入の1%は公共の為に使ひましよう。」というのが、家計のルールに書いてあります。これが「主婦の友」になりますとそれが全部消えて、「自分の為に全部使ひましよう」ということになる。近代的な共有感覚とか、お金を回すという感覚が一部あつたところもありましたが、戦後は私有観が強くなり、私有を国に回して、暴利をむさぶるという所があります。よっぽど、アメリカやイギリスの方がまともなところが残つている気がします。

岡本| SNS は、起業家的なものにもつながつてきています。国に助けられてやるのではなく、自分達でどうやれば大きなビジネスになるのか。資本や知恵等、色々な生産財を集めてくるツールとしてSNSはすごく大きな役割を果たしてくるのではないのでしょうか？今日もありがとうございました。